

ようこそ、 絵本の森へ

ーロングセラーを読み解く

島根県立大教授 岩田英作さん

ロングセラー絵本を、山陰両県の専門家が読み解く企画。今回は島根県立大松江キャンパス「おはなしレストラノラインラリー」代表の岩田英作さんが担当します。

おおきなかぶ

A・トルストイ再話、内田莉紗子訳、佐藤忠良画(福音館書店)

〈あらすじ〉

おじいさんが植えたかぶが、甘くて元気のよい大きなかぶになりました。「うんとこしょ、どっこいしょ」と抜こうとしますが、なかなか抜けません。

ロシアの民話「おおきなかぶ」は、1955年に小学1年生の国語教科書に採用されて以来、今日まで長く親しまれてきました。へんな言い方もしれませんが、日本で「おおきなかぶ」を知らずに大人になることはほとんど不可能といつていいくらい、「うんとこしょ、どっこいしょ」のかげ声は私たちの心に染みついていきます。

「おおきなかぶ」の絵本はいろいろな種類のもので出版さ



14



「おおきなかぶ」A・トルストイ再話、内田莉紗子訳、佐藤忠良画(福音館書店)

いかぶができました。「のとつともなく」がそれです。「とつとつ」を漢字で書くことのできるわだちのことで、「道筋」とも言い換えることと理解しやすいかも「とつともなく」とは、道筋をつけて考えることができないというほどの意味で、平たく言

両方に拍手する懐の深さ

それとも教室くらい？ いやいやと学校くらい？ ひよつとして島根県くらい！ …… 読者はそのとつともない大きさを、描かれていないがゆえに自由に想像することが出来ます。読んでいてワクワクする瞬間です。さて、「おおきなかぶ」は、とても不思議なルールが存在

大きいことも、小さいことも、すばらしい



「おおきなかぶ」A・トルストイ再話、内田莉紗子訳、佐藤忠良画(福音館書店)

します。かぶを引っ張るとき、自分より小さいものを呼んでくるというルールです。自分の力で抜けないのなら、自分より力持ちの大きな人を呼んでくれればいいようなものですが、誰もそうしません。

「おおきなかぶ」のもう一つの不思議に、孫にとつての父母が登場しない点が挙げられます。おじいさん、おばあさんときて、次に父親でも参加していたなら、かぶは抜けていたかもしれません。けれどとたんに先ほどのルールは

いわた・えいさく 1963年、雲南生まれ。島根県立大人間文化学部教授。松江キャンパス児童図書館「おはなしレストラノラインラリー」代表。子どもが生まれ、大学で読み聞かせの授業に携わったことで「絵本愛」が芽生えた。



破綻します。むしろ、ルールを守るために父母の出番はなかったとも考えられるくらい、大から小への順序は「おおきなかぶ」にとつての鉄則なのです。おじいさん、おばあさん、孫の女の子ときて、次にイヌからネコ、そしておしまいはネズミが引っ張って、めでたくかぶは抜けたのでした。

「おおきなかぶ」のおもしろさは、なんといってもそのかぶの大きさを想像して楽しむことにあります。と同時に、もつひとつのおもしろさは、最後にちつぽけなネズミの加勢によつてそのとつともない大きさがかぶが抜けることです。大きいことはすばらしい、けれども小さいことだって負けないくらいにすばらしい。その両方に拍手が送られるところに、「おおきなかぶ」の懐の深さがあります。

「おおきなかぶ」はロシアの民話であるが、最初には言いません。やはり、現在のロシアとウクライナのことを、どうしても思わずにはいられません。大きいことも小さいことも認めあえる「おおきなかぶ」の世界観を、今ほど尊く感じたいことはありません。

(島根県立大教授) 次回(12月3日掲載)「タイトルカット、似顔絵(くさなり)」

手話とゲーム伝わる心

島根県大生カフェで交流

松江

手話の魅力を知ってもらおうと、島根県立大松江キャンパスの学生による「手話カフェ」が20日、松江市北堀町の県知事公舎であつた。松江ろう学校の生徒、学生や一般市民ら約50人が、手話による自己紹介やジエスチャーゲームを通じて交流を深めた。

同大の特別支援学級に関する講義で手話を学ぶ機会があり、関心を持った保育教育学科3年の斎藤紗希さん(21)ら4人でつくるグループが企画。「手と手をつなごう」をスローガンに、松江ろう学校や障害者福祉施設を運営する四ツ葉

福祉会(松江市古志町)に声を掛け、交流の場をつくった。

カフェは3部制で、1回1時間ずつ開いた。来場者



ジエスチャーゲームで交流する参加者。松江市北堀町、県知事公舎

は10人ほどのグループになり、手話で名前や趣味を紹介した後、与えられたお題を身ぶり手ぶりで相手に伝えるジエスチャーゲームに挑戦。頭の上に両手を伸ばしてウサギを表現したり、体を震わせて冬を表したりし、伝える側と受け取る側が互いに相手の気持ちをよくみ取りながら楽しんだ。

参加した松江市立津田小学校2年の上田眞一郎君(8)は「いろんな手話が学べた」と話し、松江ろう学校高等部3年の加藤佳朋さん(18)は「手話を知りたい人が多くいたことがうれしい」と笑顔を見せた。

県知事公舎に丸山達也知事は住んでおらず、イベントなどで使われている。

(勝部浩文)